



# 大人が絵本を 第55回 いざ、出発！



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*  
小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

## 令和生まれの子どもたちが夢中になる 昭和生まれの絵本

平成時代の30年が終わり、新しい時代「令和」の幕開けです。日本の元号が平成となった時を同じくして、お隣の韓国で初めて独自の絵本が生まれ、わが国のひと時代となる30年の間に、韓国絵本文化は確立をみせました。日本の絵本の歴史が韓国より古いことは明白ですが、では、いつの時代に創生したのか、ご存知でしょうか。

『ぐりとぐら』(中川李枝子 作、大村百合子 絵)や『いないいないばあ』(松谷みよ子 作、瀬川康男 絵)など50歳を迎えても、なお勢いのあるロングセラーのお話をしましたので、その歴史が50年を優に超えることは分かります。

赤ちゃん絵本としての存在感を圧倒している『いないいないばあ』(童心社)の初版は1967年4月ですから、今、52歳を迎えたばかりです。半世紀にわたって、たくさんの赤ちゃんとその家族に幸せをふりまいてきた絵本は、それもそのはず、今日までの発行部数が664万部に伸び、国内絵本ランキング堂々の1位です<sup>1)</sup>。

ランキング2位の『ぐりとぐら』(福音館書店)は、1963年の誕生から55年の間に517万部が世に送り出されています<sup>1)</sup>。続く3～5位に『はらぺこあおむし』などの翻訳絵本が並ぶと、6～9位を日本の絵本が占め、うち8位には、1966年初版の『ぐりとぐらのおきゃくさま』が位置するのです。昭和30年代後半に生まれた野ねずみは、その存在を確固たるものとし、今や、祖父母世代と孫世代が共通の親しみをもって楽しめる国民的アイドルの域にいます。

## 50歳おめでとう！

日本の絵本が、世界的にも質の高いことは周知のとおりでして、20世紀半ば以降、言及すると1960～70年代に刊行された絵本は、特に長寿という特徴にあります。初版印刷限りで増刷なしの発行スタイルが目立つ21世紀生まれの絵本と異なり、増刷が重ねられているのです。長寿の最大の要因は、子どもと大人の読者に愛好され、目に見える評価を受けていることです。

そして、今年2019年、新たに50歳のロングセラーの仲間入りをするのは、発行部数ランキング7位の『ねないこだれだ』(せなけいこ作；304万部)と、おしゃれの想像が果てしなく膨らむ『わたしのワンピース』(西巻茅子 作)、それに『くまの子ウーフ』(神沢利子 作)と、1969(昭和44)年に刊行された絵本・童話で、現在アラフィフ世代が子ども時代にお友だちであった愛おしいキャラクターたちなのです。



『ねないこだれだ』  
せなけいこ作・絵  
(福音館書店)



ちなみに、ランキング3位の『はらぺこあおむし』(偕成社)も、本国アメリカで1969年に出版されたので、今年50歳のアニバーサリーイヤーです。

50歳の絵本のお話は、チェアサイドに楽しいコミュニケーションを生み出すことでしょう。

## 日本で、いちばん古い絵本はなんでせう

それでは、冒頭の質問に戻りましょう。日本で現

# 手にするときは！

## 絵本の歴史旅

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

存する最古の絵本とは、平安時代の絵巻物ですので、絵本の起源は千年を超えているのです。しかし、絵巻物は大人が対象でしたから、子ども向け絵本の誕生となると、江戸時代初期(1666年)に中村惕斎<sup>なかわらてきさい</sup>が著した『訓蒙図彙』<sup>きんもうずい</sup>が歴史に記録されています。1ページ、あるいは見開き2ページが最小の単位をなして独立し、連続した物語展開のない形態となっていて、いわば一般向け百科事典の要素もありましたが、言葉と絵が1対1の関係にあったため、最初の絵本とされています。

### 歴史のいたずら。神隠しならぬ「地蔵隠し」

現在のようなページめくりの連続によってストーリーが展開し、ナラティブをもつ絵本が生まれたのは、1667(寛文7)年です。つまり、『訓蒙図彙』と同時代に、現在の「絵本」の形態と同じ物語絵本が刊行されているのです。そうであるのに、『訓蒙図彙』がもっとも古い絵本として歴史に名前を刻み、流布されているのには理由があって、寛文7年刊の絵本が、永きにわたって判明されていなかったからに他なりません。この絵本に光が当てられたのは、昭和時代も後期のこと、1980年なのです<sup>2)</sup>。

「寛文七丁未年二月吉日」と刊記された絵本が発見される300年もの間、日本における物語性をもった子ども向けの最初の絵本は、草双紙の「赤本」と言われてきました。1678(延宝6)年刊行ですので、『訓蒙図彙』より約10年後と歴史認識されていたのです。

ところが、時代も文明も経済も、何もかもが大きく変化し、平成時代になる9年前の昭和55年になって、赤本よりも以前に刊行された絵本の存在が認識されるのです。それは、松坂市にある寺の地蔵の胎

内に納まっていた書物が重要文化財に値するのではないかとの仮説が立てられ、考証の結果、10冊が子どもの絵本だと診断されて、日本の子どもの絵本の歴史が塗り替えられることになったのです<sup>2)</sup>。

今、子ども向けの絵本は創生してから350年の歴史を刻んでいるということになります。日本が世界でも有数の絵本文化を誇る所以のひとつが、この歴史にあるのです。

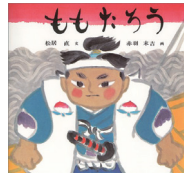
### 350年読み継がれる国民愛読書

半世紀にわたり、子どもと大人に愛され続けてきたぐりとぐらよりも、もっと永く日本人に親しまれているお話があります。それは、日本の子どもの本の先駆けといわれる昔話です。そもそも子どもを対象として作成されていなかったため、昔話の刊行は、子ども向けの赤本よりもっと古く、室町後期から江戸時代前期頃にみられた「奈良絵本」でして、手で彩色されていました。『浦島太郎』や『一寸法師』など、現代の子どももよく知っているお話が揃っていたのです。しかし、その対象は富裕商人階層の子女で、嫁入り道具のひとつでもあったのです。大人向けとはいえ、富裕層の子どもたちも見ていたわけで、この文学美術的な奈良絵本が、書物文化として、そして児童的文化として、一歩前進を見せる絵本となりました<sup>3)</sup>。

その後、江戸時代になって刊行された子ども対象の絵本である赤本に、昔話が目立つようになります。日本人なら、赤ちゃん以外の誰しもが知っている『桃太郎』の絵本化も江戸中期から始まりました<sup>4)</sup>。今も増刷を重ねている『桃太郎』のうち、もっとも古いのは、赤羽末吉画による1965年刊行の福音館書店版です。



『ももたろう』  
松居直文 赤羽末吉 絵  
(福音館書店)



### 巖谷小波を知っていますか

江戸時代に生まれた赤本は、明治期に引き継がれますが、どぎつい赤色が表紙の、廉価な「赤本絵本」となって、おもちゃと一緒に並べられていました。おもちゃ扱いでもあったため、絵本の歴史において、本格的な子ども向けとされているのは、1891(明治24)年、博文館の「少年文学」叢書に掲載された巖谷小波の『こがね丸』に一説があります<sup>5)</sup>。小波は1894~1896(明治29)年にかけて、ちりめん本で『日本昔噺』を刊行し、「桃太郎」「猿蟹合戦」「花咲翁」「かちかち山」などを収載しました。1896~1899(明治32)年に刊行した『日本お伽噺』では、子どもたちへ口で話すような文章を書き、漢字にルビをふって、子ども向け絵本の特徴を打ち出しました。

しかし、その文語体のスタイルに対して批判もあり、言文一致ではない『こがね丸』を絵本とみなさない論より、子ども向け絵本の起点を小川未明の『赤い船』に見る説も残されています<sup>5)</sup>。いかなる分野でも、様々な要素で未分化が存在することは否めないところですが、小波が「日本の絵本史上に先駆的な役割を果たした」ことは紛れもない事実です<sup>6)</sup>。

『こがね丸』が刊行される4年前の1887(明治20)年には、グリム童話が日本で初めて翻訳され、日本の昔話だけでなく外国のおとぎ話に触れることができるようになり、日本の絵本史に影響を与えるのですが、小波自身も翻訳活動を手掛けるようになります。ドイツに留学した後、1895年に『子猫の仇』(『オオカミと七匹の子ヤギ』)を翻案、1896年に『小

雪姫』『紡績姫』などを日本人に紹介して、明治期の童話文学を築くとともに、その後の日本の児童文学が発展する礎を作ったのです。



### 江戸の絵本を読んでみませんか

巖谷小波の足跡をたどると、児童文学の活性に向けて、精力的に働きかけ、活動したこと分かります。明治の出版文化を牽引してきた博文館が1906(明治39)年に創刊した、月刊「幼年画報」の監修に小波が携わるのです。また、小波は口承などの古来の童話を「昔噺」、創作および創作的再話の童話を「お伽噺」と区分した日本人初の児童文学研究者でもあります<sup>3)</sup>。

小波の「桃太郎昔話」は、『江戸の子どもの本；赤本と寺子屋の世界』(笠間書院)で、今も手軽に読むことができます。当時、批判もあったという文語体の桃太郎話は、現代人を江戸時代へと誘うでしょう。



### 絵雑誌の登場と、児童文学の幕開け

日本の絵本の歴史をひも解くとき、単行絵本とともに絵雑誌をたどる必要があります。最も古い絵雑誌は、「子供のはな誌」とされ、グリム童話が日本に初めて紹介された同年の1887年に出現しました<sup>6)</sup>。

20世紀に入ると、1904(明治37)年創刊の「お伽解こども」を皮切りに、絵雑誌は急激に増えるのです。1914(大正3)年に創刊された羽仁とも子主催の「子供之友」(婦人の友社)は、あまりにも有名です。

時代が大正に入ると、人生の先輩諸氏の記憶に鮮明な「赤い鳥」が鈴木三重吉らによって刊行され、いよいよ広義の“児童文学”の幕開けです。西暦では1918年の創刊ですから、昨年2018年に100周年を迎え、国際子ども図書館をはじめ関連諸施設で特別展が公開され、フィーチャーされた一年でした。すなわち、近現代の絵本の歴史も100年というわけです。

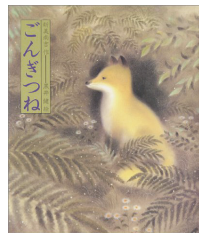
この「赤い鳥」誕生の裏には、小波の絵本スタイ



ルに対し、文化性と芸術性を追求する趣旨がもたれた経緯もあります<sup>5)</sup>。近代日本の児童文学は、巖谷小波に始まり、「赤い鳥」を契機として童話・童謡雑誌が刊行されたことで、開花したのです。

小川未明、新見南吉、浜田広介、宮澤賢治ら大正時代に排出された児童文学作家は、現代でもなお、その名を轟かせている偉大なる人物です。『ごんぎつね』の初出は1932年1月ですので、87年の時を超えて親しまれ、複数の画家の手によって物語のタッチが変わっても、変わらない悲哀の涙を呼び続けているお話なのです。

『ごんぎつね』  
新見南吉 作 黒井健 絵  
(偕成社)



多くの先人の探求と挑戦、そして創造物に敬意を表し、今、当たり前のようにある著作物の山々や、絵本文化の構築された暮らしに感謝して、その喜びを子どもたちとどんどん共有しましょう。

## 今も元気な戦前生まれの絵雑誌

戦前・戦中の児童文化を形成した絵雑誌の中でも、1922(大正11)年に東京社から創刊された「コドモノクニ」はその中軸となり、教育的な色合いの強い「子供之友」に対して、芸術性が追求されました<sup>6)</sup>。この「コドモノクニ」とほぼ同時期に創刊され、令和時代の現在も子どもたちの元に届けられている雑誌があるのです。それは1927年にフレーベル館が創刊した、国内最初の月刊保育絵本となる「キンダーブック」です。戦時中、一時中断しながらも日本の出版文化の歴史を生で見えてきた絵本雑誌は、今年、創刊92周年を迎える長老です<sup>6)</sup>。

時局が戦争へ向かう1936(昭和11)年には、単行本形式の全ページ多色刷りの「講談社の絵本」が、大量

生産、大量販売の形で発行され、戦前における絵本出版ブームをもたらしました。しかし、戦争の時代に突入し、この流れは中断されてしまうのです。

## 千年の時の流れに思いを馳せて

子どもの絵本の歴史をお話してきましたが、室町時代から戦前まででお時間となり、戦後の絵本ブームにたどり着くことができませんでした。それでも、日本初の子どもの絵本が、お地蔵さんの胎内に永く眠っていたことや、昔話が嫁入り道具だったことなど、子どもも大人も「へえ〜!」と驚く小ネタを、早速、歯科医院内で振りまいて下さい。

ページをめくる子どもの指と、重なる大人の声によってストーリーが生まれ、読む者のペースで作られるナラティブな世界をもつ絵本は、350年もの昔の人によって創り出されていたのです。

「大人が絵本を読むときは」、その裏に潜むものをじっくり探り、五感を総動員して、言葉と絵に表現されていないメッセージを感じ取ることも必要です。それは、先人との会話になりますし、歴史や文化を深めることにもなります。何より、大人が自己と対話する最良の方法なのです。そういった体験をもって、子どもたちと一緒に絵本の喜びを分かち合ってください。きっと、絵本がより一層、輝いて見えるでしょう。

子どもの絵本の歴史を知り得た大人の皆さまは、子どもたちへの絵本伝道者です。



### 文献

- 1) トーハン: ミリオンぶっく2019, トーハン, 東京, 2019.
- 2) 岡本勝: 子どもの絵本の誕生, 弘文堂, 東京, pp.7-15, 1988.
- 3) 上 笙一郎: 近代以前の児童出版文化, 久山社, 東京, pp.34-57, 1995.
- 4) 叢の会: 江戸子どもの本, 笠間書店, 東京, pp.2-5, 2006.
- 5) 国際子ども図書館: 日本の子どもの文学, 国際子ども図書館 HP <http://www.kodomo.go.jp>
- 6) 日本児童出版美術家連盟: 月刊絵本クロニクル, 日本児童出版美術家連盟, 東京, pp.4-10, 2005.